

ひびきあいを感じて演奏しよう 「茶色い小びん」

授業のポイント

友達を意識して、互いに聴き合い、認め合いながら、学び合って、表現する力を高められたか。

「友達を意識して、互いに聴き合い、認め合いながら、学び合って表現する力」をつけ、伸ばすことを目標として、子どもの実態と教師のとらえる課題から、音楽という学習場面を選んだ。

音楽活動を通して、友達を意識して、聞き合い、互いに認め合いながら、学び合いことが、互いのよさや可能性に気づききっかけになると考え、振り返りカードには、自分に対する振り返りだけでなく、友達とのかかわり、友達の活動も意識して書くことができるよう、声をかけ続けてきた。友達を意識し、互いが心地よく感じられるように、みんなで1つの曲を演奏できること、すなわち【学び合い】が高まることを願った。

授業改善に向けての考察

演奏後の子どもの気づきからよりより表現の追究へ

最初は、自分の音を演奏することだけに夢中であったり、全体的な音のバランスを考えることが少なかった子どもたちである。それが、演奏を重ねたり、互いの演奏を聴き合えるたりするようになってくると、「リコーダーは、もっと指揮が見えるように工夫して並んだ方がいいね。」「打楽器の音量を調節したら、もっと全体のバランスがよくなるね。」という声が出てきた。最後には、39人の子どもたちが、それぞれ互いの音を感じ合いながら、音を心地よく感じ、楽しんで合奏・合唱できるようになった。

教師から見て、子どもに必要な育てたい力を指導することも大事だが、子どもたち自身の気づきの声（カードの取り上げ方など）をもっと大事にして、よりよい演奏表現ができるよう支援・指導していくことが課題であると考えている。

よりよい演奏を目指して

子どもたちから、よりよい演奏を目指してたくさんのよい気づきが出てきたので、教師は、演奏の回数をもっと設けたり、正確な楽器の演奏の仕方を指導する必要があったのではないかと反省している。ただ音が出ればよい、拍を合わせて友達と演奏すればよいというのではなく、これからは、楽器の置き方（鉄琴）や配置の仕方（リコーダー）など、細かいところまで配慮した演奏を目指していきたい。